

待ちに待った給食
むぎごはん 野菜サラダ
ハヤシライス
えびシューマイ

夢のほぼ日刊 star chart

第718号

神町中学校 夢色通信社
令和2年9月16日

東根市神町中で11日、戦争と平和に関する特別授業がオンラインで行われた。3年生は5月に修学旅行で沖縄を訪れ、戦争にまつわる史跡などをめぐる予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大で中止になった。今回、現地で遺骨収集ボランティアを続ける関係者がオンラインで講演し、3年生140人に平和の尊さを訴えた。

胸に迫る 平和の尊さ



講演したのは、沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤ」代表の具志堅隆松さん。具志堅さんは75年前に多くの犠牲者を出した沖縄戦に関し「遺骨を何とか家族のもとに送り返したい」とボランティアで40年近く遺骨収集を続けている。多くは身元が特定できていないのが現状で、具志堅さんは鑑定に必要な遺族の

DNA採取を行うよう国に要請してきた経緯などを説明した。

太平洋戦争へと突き進んだ戦時の世相に触れ「この戦争を途中でおかしいとは思わなかったのと、さまざまな人に尋ねてきた。当時は自由にものを言えない時代。しかし、強者が弱者の権利を搾取しようとした時には、強者を批判することが平和につながる」と訴えた。

生徒からは「戦争を経験していない私たちが、戦争を起こさないために必要なことは何か」との質問も。具志堅さんは「戦争を体験した祖父母がいれば、戦争についてどう思うかを自分の言葉で質問し、その答えを心に刻んでほしい」と語った。

3年阿部母香さん(15)は「遺骨が沖縄に残っていることは知っていたが、DNA鑑定など大変な作業が必要なのが分かった。自分にできることがあれば考えたい」と話した。

(9月16日 山形新聞より)

「平和講和」を通して、戦争への関心が高まりました。子どもが家族のために命がけで戦争に行っているのに、遺骨が見つからず家族に返してあげることができないのは本当に悲しいことだと思います。若い世代の私たちは戦争を経験したことがないからこそ、当時の話を聞き未来に残していかなければいけません。「死」という言葉をかんたんに使わないで、生きているということに感謝し、戦争で亡くなってしまった人の気持ちも考えて生きていくことが大切だと思います。戦争が、これから先起きないように願いたいです。沖縄に行くことはできませんでしたが、貴重な時間でした。(庄司唯莉)

沖縄戦で亡くなった方の遺骨を、家族のもとに返したいという具志堅さんの思いが本当に素敵だなと思いました。今もなお、沖縄戦で亡くなった方の遺骨が見つかっていないと聞いて、胸が苦しくなりました。「死」と「殺される」は全く違います。「殺される」ことは、絶対に許されないことだと改めて感じました。生物にとって、「死」は必ず訪れます。だから1回しかない

東根・神町中 沖縄の遺骨収集男性、リモート講演

人生を、自分の命を大切に生きていきたいです。（後藤夢希）